

小児用肺炎球菌ワクチン予防接種について

この予防接種は、予防接種法に基づき、肺炎球菌による重い感染症を予防するために実施するものです。必ず本紙をよく読んでから、委託医療機関で接種を受けてください。

接種時の持ち物

☆母子健康手帳 ☆予防接種予診票兼受診票 ・マイナンバーカード ・子育て支援医療費受給者証
(資格確認書など)



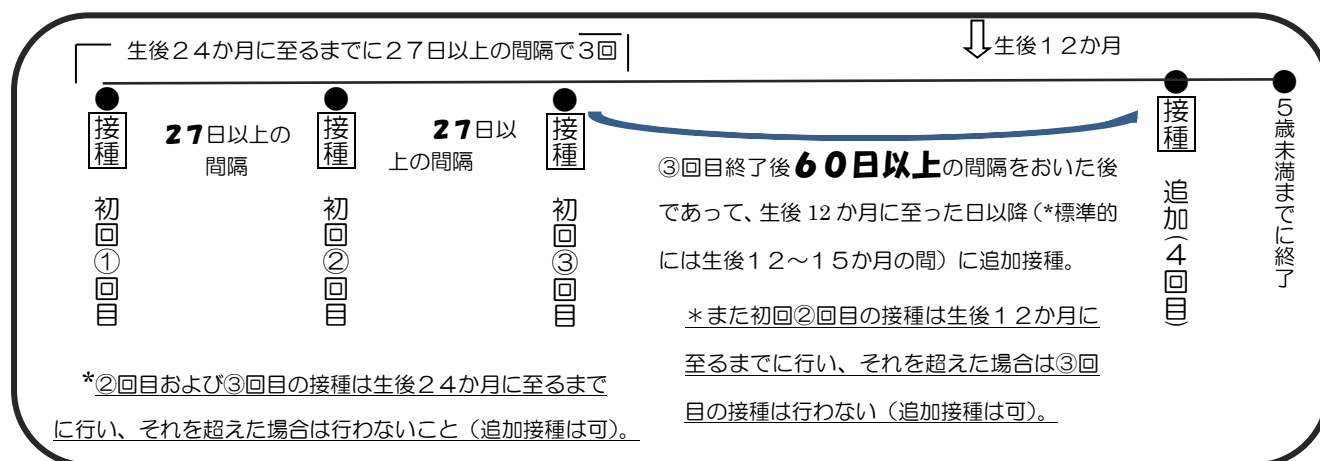
対 象 者

生後2か月～5歳未満まで

接種回数と間隔

標準的な接種開始時期 生後2～7か月の前日までにスタート

【標準的な接種方法】



※上記、標準的な接種年令で開始できなかった場合

●生後7か月～12か月に至るまでに接種を開始した場合

- 初回接種2回と追加接種1回となり、間隔は上記標準的な接種方法と同じ。
(ただし②回目は生後24か月に至るまでに行う。
それを越えた場合②回目は接種できないが追加接種は可)

●生後12か月（1歳）～生後24か月（2歳）に至るまでの間に接種を開始した場合

- 2回を60日以上の間隔で実施。

●生後24か月（2歳）～生後60か月（5歳）に至るまでの間に接種を開始した場合

- 1回で終了

病 気 の 概 要

- 1 肺炎球菌は子どもの多くが鼻の奥に保菌していて、子どもの感染症の主な原因菌です。保菌者の全てが発症するわけではなく、抵抗力の低下などにより菌が体内に侵入すると細菌性髄膜炎、菌血症、肺炎、副鼻腔炎、中耳炎といった病気をひきおこします。

- 2 特に肺炎球菌による細菌性髄膜炎にかかると、治療を受けても約2～5%の乳幼児が死亡し、約15～30%に聴力障害・神経障害などの後遺症を残します。
- 3 肺炎球菌による細菌性髄膜炎は、2歳未満の乳幼児で特にリスクが高く注意が必要です。

副 反 応

小児用肺炎球菌ワクチンの接種後に他のワクチンでもみられるのと同様の副反応がみられますが、通常は一時的なもので、数日で消失します。最も多くみられるのは、接種部位の発赤や腫脹、硬結です。また全身的な反応として発熱、易刺激性、食欲減退、傾眠状態がみられます。

重い副反応として非常にまれですが、海外で次のような副反応が報告されています。

- (1) ショック、アナフィラキシー様症状（じんましん、呼吸困難など）
- (2) けいれん（熱性けいれん含む）(3) 血小板減少性紫斑病等

注 意 点

- (1) 予防接種は健康な人が元気な時に接種を受け、その病原体の感染を予防するものです。体調の良い時に受けることが原則です。お子さんの体調をよく理解した保護者がお連れください。
- (2) 予防接種を受けることができない人
 - ① 明らかに発熱（通常37.5度以上）している人
 - ② 重篤な急性疾患にかかっていることが明らかな人
 - ③ 予防接種等によりひどいアレルギー反応を起こしたことがある人
 - ④ その他、医師が不適当な状態と判断した場合
- (3) 予防接種を受けるに際し、主治医とよく相談しなくてはならない人
 - ① 心臓病・腎臓病・肝臓病や血液、その他慢性の病気で治療を受けている人
 - ② 過去の予防接種2日以内に発熱・発疹等のアレルギーを思わせる異常がみられた人
 - ③ 過去にけいれんをおこしたことがある人
 - ④ 免疫不全があると指摘されたことがある、及び近親者に先天性免疫不全症の人がいる人
 - ⑤ ワクチンの成分に対して、アレルギーをおこすおそれのある人
- (4) 予防接種を受けた後の一般的注意事項
 - ① 接種後30分間は、急な副反応が起こることがまれにありますので、医療機関でお子さんの様子を観察するか、医師とすぐ連絡をとれるようにしておきましょう。
 - ② 副反応の多くは1週間以内に出現しますので、この間は体調に十分注意しましょう。
 - ③ 入浴は差し支えありませんが、注射部位を強くこすることはやめましょう。
 - ④ 接種当日はいつもどおりの生活をしてかまいませんが、激しい活動は避けましょう。

<問い合わせ先>

子育て支援課

0774-64-1377（直通）